

## はじめに

言語研究の大きな流れの中で、この30年来の特徴的な傾向として挙げられることは、純粋な記号の体系として文脈から取り出された構造体としての言語研究から、より広い文脈の中で起こる人間の行動としての言語研究へと視野が拡大されてきたことであろう。「文字」という形で取り出された言葉が、再び「声」という身体性を取り戻そうとしているとも言える。これは、言語学内部における研究の深化がもたらしたものであると同時に、社会学、心理学、認知科学、情報科学などの隣接諸領域の発展とともに、様々なテクノロジーの進歩、つまり録音、録画装置やコンピューターなどのハード面の普及に加え、様々な分析ソフトの開発などの貢献によるものである。

本研究においてもこれらの機器の助けを借り、各種の状況で発せられた日本語の音声談話を様々な角度から分析していくわけだが、その際単に韻律面の音声的特徴の記述に終始するのではなく、談話そのものの社会的文脈や評価、対話者間関係などコミュニケーション上の問題も考察の対象にし、社会言語学的な観点も踏まえた日本語の韻律的特徴の記述を目指す。

詳しい研究史については後に譲るとして、1960年代に社会学の分野で取り入れられた談話分析の方法が言語研究にも導入され、電話の談話や「謝罪」や「依頼」などの限られた範囲の談話分析、会話分析が盛んに行なわれるようになった。これらの研究では、談話というより大きな単位を取り上げながらも、部分の詳細な観察と記述が中心であり、「文字化できない」部分、つまり主にイントネーションなどの韻律的特徴に対する注意が十分に払われてこなかったきらいがある。一方、イントネーションに焦点を当てて進められている研究では、イントネーションそのものが持つ文法的役割や、聞き手の理解にどのように影響するのかなどを探るために、当該のイントネーションを際立たせた特別の短文を用意し、それについて音声分析したり聴取実験したりという方法がとられているが、談話全体について扱ったものは少なく、分析の対象となる談話の種類もニュース原稿の朗読や簡単な疑問文の含まれた会話などに限られている。

ここでは、これらの研究成果を踏まえ、各種の談話に現れる特徴的なイントネーションを個別に分析する一方で、談話全体を通して見られる韻律的特徴(イントネーションに限らず)と、それらの談話内容やコミュニケーション上の特性などとの関連についても、広く考察の対象にしていく。従来個々別々に進められてきた談話研究や音声研究、コミュニケーション研究などのそれぞれの長所と独自の視点を取り入れ、より立体的、総合的に日本語の音声を記述するために、これは不可欠な作業だと考えられる。普段使われているどの言葉も、社会的な文脈を離れては存在しえないし、また社会的な「色付け」が一切なされない言葉もありえないにもかかわらず、多くの場合「言語」研究のため一時的にやむを得ずそれらを捨象して研究が進められてきた。そのような精度の高い厳密な研究からしか得られない貴重な成果も数多く得られたことは確かだが、ここでもう一度「言葉」を様々

な社会的文脈、談話へと戻して捉えなおす必要があるのではなかろうか。

談話への関心を述べると、一般には、談話・会話分析が思い起こされるかもしれないが、本研究は各種の音声談話における日本語(東京を中心とした共通語)について、イントネーションを中心とする韻律的特徴の面から捉えようとするものであり、発話された言葉の意味と談話の構造との関係を探る従来の談話・会話分析とは若干異なる。

ところで母国語なら(ときに外国語でも)言葉がはっきり聞き取れない隣室のテレビでも、その音声を頼りに、ドラマなのか、演説中継なのか、スポーツ実況なのか分かることがある。これはなぜなのか。おそらくは、イントネーション(特に「話調」とよばれるもの)や、間合いや、背景の音などの様々な「音声」の特徴を経験に照らして理解しているからだと考えられる。これまでの研究から、すべてのイントネーションが、どんな場合でも均等に現れるということは考えにくく、場面ごとに現れやすいイントネーション、現れにくいイントネーションというものがあるのではないかということが考えられる。句末イントネーションの型の分布を一つの鍵に、様々な談話の特徴を記述し、日本語の音声談話の韻律構造を明らかにしようというのが本研究の目的である。

第1章では、日本語のイントネーション研究史および、周辺分野の先行研究について概観し、「話調」という言葉を再起用して、本研究の方法論について論じる。第2章では、イントネーションと談話との密接なつながりを示す一例として、いわゆる「尻上がり」イントネーションについてその音響的特徴や談話・文法上の機能を実証的に明らかにしつつ、社会言語学的考察を加える。そして第3章では各種の音声談話から得られたイントネーション(特にいわゆる「尻上がり」イントネーションも含めた句末イントネーション)についての統計的類型化を試み、それぞれの型について音響上の特徴を明らかにし、その機能について考察した上で、談話種別の句末イントネーション型の出現分布を明らかにする。第4章では各種の談話のイントネーション以外の韻律的諸特徴について概観したうえで、これらを説明変数にして因子分析を行い、これまで「話調」(あるいは口調や言葉調子)などと呼ばれてきた曖昧な音声談話の全般的音調を類型化する。つまり「話調」の科学的分析・記述を試みる。第5章では、全体のまとめとしてイントネーションの離散性に関する認知言語学におけるプロトタイプ論の知見から考察を加え、韻律的諸特徴の総体としての「話調」が何であるのか、及びこれを解明することの意義について検討するとともに、「話調」研究の将来的展望を述べる。

本研究は、そもそもいわゆる「尻上がり」イントネーション現象に見られるような言語使用意識とその言語使用に対する評価の乖離から生じる様々なステレオタイプが持つ意味についての素朴な驚き(あるいは憤り)に端を発するが、本研究を通じて、間断なく現れるこの種のステレオタイプや言葉に対する様々なバッシング現象に対する感性を呼び覚ますことができれば幸いである。また、本研究が古くからその存在が指摘されてきた曖昧な印象の元とも言える「話調」の物理的な存在証明とその科学的解明への第一歩となり、日本語の社会言語学に何かしらの貢献ができれば幸甚である。